

創世記2章 「人の創造」

1A 神の安息 1-3

2A 男の創造 4-25

1B いのちの息 4-7

2B エデンの園 8-17

1C 潤いの川 8-14

2C 神の命令 15-16

3A 女の創造 18-25

1B 名づける仕事 18-19

2B 一体となる相手 20-25

本文

私たちは、前回、神が天と地を創造されたところを読みました。神は六日かけて天と地を造られました。初めは、形もなく、むなしかったのですが、光を造られ、大空を造られ、太陽や月を造られ、一つ一つ形を造り、また命を造られました。植物、海と空の動物、そして陸の動物と人を造られました。神は人をご自分のかたちに造られて、それらのものを支配するようにと命令し、祝福されました。そして 31 節で、「そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった。」と言われました。そして今日は七日目から入ります。

1A 神の安息 1-3

2:1 こうして、天と地とそのすべての万象が完成された。2:2 それで神は、第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられた。すなわち、第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。2:3 神はその第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。

第七日目は、主は休まれました。私たち人間が休む時は、疲れているから休むのですが、神は疲れることはありません。ここの「休まれた」というのは、天地創造の働きが完成したので、それ以上、付け足すことはないからです。ご自分が完成された業を見て、それでそれを祝福しました。したがって、完成されたところに留まる、休むということはとても大切です。私たちは、日々、あくせく働いています。すると、何か自分が成し遂げなければ物事が成り立たないという錯覚に陥ります。そこで、立ち止まる必要があります。実は、すべてのことは神が動かしておられて、私たちは神の中で動いているだけ、生かされているだけであることを知ります。

しかし、人が根本的に休むことができなくなったのは、罪を犯したからです。罪があるために、心が静まることができなくなりました。しかし、神はこのことについての休みを与えてくださいました。

イエス様が十字架の上で死なれる時に、「完了した。(ヨハネ 19:30)」と言って死なれました。救いのために必要なことは、すべてイエス様が行なってくださったのです。

したがって、それ以上に救われるために必要なことは残されていません。したがって、私たちが教会で礼拝に集うのは、まさに救いにおける安らぎを確認するためです。私たちが教会で何かを成し遂げるために集まるのではなく、神がすでにしてくださったこと、特に神の大いなる救いをほめたたえ、喜び、そして自分が神以外の罪や重荷を持っているのであれば、それを捨てて楽になることです。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたのたがたを休ませてあげます。(マタイ 11:28)」

創世記を書いたのはモーセですが、主がこの「安息」を記念して、イスラエルの民に、安息日を守りなさいという命令を与えられました。しばしば日曜日と誤解されるのですが、そうではなく土曜日です。今でもイスラエルの国では、土曜日になると公共機関はすべて停止し、お店もほとんどが閉まってしまいます。ちょっと昔の日本の正月のように、毎週土曜日ひっそりとするのです。

そして、「この日を聖であるとされた。」とあります。聖なるものとするとは、別つという意味です。他の日から別ち、そしてそれを神のものにするということです。休むことと、その日を聖なるものとするとは、一対になっています。私たちは礼拝の中で、神がすべてを支配しておられることを認めます。もし、自分が自分の生活をやりくりしているのだと思っていたら、礼拝してもそわそわしてその場にいることはできないでしょう。神は全てを知っておられ、ゆえに礼拝において私たちは自分の心を神に探っていただきます。自分の隠し事は隠しておきたいと思っていたら、これまたそわそわしてその場から出て行きたくなります。ですから、休むことと聖なるものとするとは一対であります。

2A 男の創造 4-25

1B いのちの息 4-7

2:4 これは天と地が創造されたときの経緯である。神である主が地と天を造られたとき、2:5 地には、まだ一本の野の灌木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。それは、神である主が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである。2:6 ただ、霧が地から立ち上り、土地の全面を潤していた。

神は再び、天地をお造りになった時の話をさかのぼって話しておられます。一度話したのに、なぜまた話すのか？という疑問を持つ人たちがいます。聖書には、しばしばこのような話の手法をとります。同じ出来事なのですが、初めに大まかなことを話し、それから同じ話を今度は、ある点に焦点を合わせて再び見ていくことをします。ここでは、六日目の人間の創造を改めて見ている所です。

「まだ一本の野の灌木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。」とあります。1章では三日目のことですね。陸地はできたのですが、まだ植物が生えていません。そして興味深いのは、「霧が立ち上がっていて、雨が降っていなかった」ということです。この「霧」は地下水と訳すこともできます。つまり、当時は雨が降っていませんでした。このことを知ると、ノアの時代に洪水が来るという警告を神が行なわれた時に、それを信じたノアは本当にすごいことが分かります。

2:7 その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

人間がどのように造られたかが、書かれています。人の肉体は「土地の塵」によって神が造られました。実際に、人間の肉体の要素の17成分は、土の中にある17成分と同じであると言われます。そして、「その鼻にいのちの息を吹き込まれた」とあります。これが人間と動物を決定的に区別する神の働きです。ここの「息」はヘブル語で「ルアク」であり、これは、「霊」とも「風」とも訳すことのできる言葉です。つまり神は人間に、ご自分の霊を吹き込まれたのです。

それゆえ人間は「生きもの」となったとあります。霊をもった人となりました。人間が成り立っている三つの部分です。肉体と魂と霊を持っています。魂は今日の精神と言い換えることのできる部分で、意識の部分です。植物は体しか持っていません。動物は、意識はありますし、体もあります。けれども、動物には霊がないのです。神のかたちに造られておらず、ゆえに神の御霊と交わる部分がありません。けれども、人間にはあります。神の御霊は人の霊の部分において関わってくださり、それによって人は神とつながり、交わりを持つことができます。私たち人間のみが、「なぜ生まれたのか」という生きる意味を考えます。また、死んだ後はどうなるのかという永遠についても考えます。ただ食べて、飲んで、生きているのではないのです。

神は三位一体の方であります。神は、父、子、聖霊の三位一体の方ではありますが、子が父の権威に服し、聖霊は父と子の権威に服します。そして人は、霊の部分で聖霊と交わりを持ち、そして霊が魂を動かし、そして肉体を支配するのです。

肉体にはさまざまな欲求がありますが、それ自体は何ら悪いものではありません。例えば、先ほど「生めよ、増えよ」と主が命じて、祝福されたとありますが、性欲がなければ男と女はつながりません。けれども、その欲求を、神が立てられた結婚という制度の中で用いることを願っておられて、その境界線から離れると、情欲となってしまいます。ですからいつも、私たちの思い、あるいは魂の部分は、神の御霊に服しているか、それとも肉の欲求に服するかの戦いの場となっています。神の御霊に服するときに、私たちは意識の中で肉体の欲求を制御することができます。そして、まだイエス・キリストを心に受け入れていない人は、御霊ご自身から切り離されているので、自分の霊は死んでしまっており、肉体の欲求が自分の意識を支配するしかありません。

2B エデンの園 8-17

1C 潤いの川 8-14

2:8 神である主は、東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。2:9 神である主は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木とを生えさせた。

エデンの園についての記述です。「エデン」は水で潤っているという意味があります。これから水の源となっている川が出てきます。主がここから水を流す起点としてくださっているんですね。それが「東の方」と書いてあります。モーセがこれを記述しています、メソポタミヤ地方であります。

興味深いことは、世の始まりにあったこの樂園が、世の終わりには東からの王たちが来る、ハルマゲドンの戦いの地域と重なることです。「第六の御使いが鉢を大ユーフラテス川にぶちまけた。すると、水は、日の出るほうから来る王たちに道を備えるために、かれてしまった。また、私は竜の口と、獣の口と、にせ預言者の口とから、かえるのような汚れた霊どもが三つ出て来るのを見た。(黙示 16:12-13)」悪魔と悪霊どもがここにいるのですが、間もなくエデンの園にエバに対して蛇が現われます。その前には御使いケルブがエデンにいて、彼が墮落してそれが悪魔であったことをエゼキエル書 28 章 11-16 節に書かれています。

話を戻しますと、良い実を結ばせる木があり、それをいつでも、心の赴くままに食べることができました。主なる神との交わりをしていたアダムにとって、これは悪いものではなく、むしろ御霊によって自由にされている状態です。主と心が一つになっていたので、自分の食べるものはそのまま神の御心にならなっていました。そして「園の中央」に二種類の木があります。「いのちの木」と「善悪の知識の木」であります。すべての至福の中央は神の命でありました。この方につながることができ、そこに永遠の命があります。イエス様は、「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストを知ることです。(ヨハネ 17:3)」と言われました。そしてもう一つ、「善悪の知識の実」は後で主が取って食べてはならない、と言われます。

2:10 一つの川が、この園を潤すため、エデンから出ており、そこから分かれて、四つの源となっていた。2:11 第一のもの名はピシオンで、それはハビラの全土を巡って流れ、そこには金があった。2:12 その地の金は、良質で、また、そこには、ブドラフとしまめのうもある。2:13 第二の川の名はギホンで、クシュの全土を巡って流れる。2:14 第三の川の名はヒデケルで、それはアシュルの東を流れる。第四の川、それはユーフラテスである。

ここからエデンの園の、だいたいの地理的位置をすることができます。川がエデンから出ていて、それが四つの川となって流れています。11 節の川が「ハビラ」の全土を巡って流れた、とあります。ハビラはアラビア半島の北部の部分です。後に、シェバの辺りから金が採掘される話が旧約聖書にありますが、シェバはアラビア半島にあります。そして、第二の川は「クシュ」に流れている

とありますが、クシュはエチオピアのことです。そして、第三の川は「アシュル」を流れているとありますが、これはアッシリアのことで、イラクの北部です。そして「ユーフラテス」ですが、これはシリアの北部を上流とし、イラクの南部のバビロン、そしてペルシヤ湾に流れ込みます。

当時はまだ、ノアの時代の洪水による大地殻変動の前の状態です。ですから、今の地形とはかなり異なっているでしょうが、それでもおそらくイラクとシリアの北部の辺りであると考えられます。けれどもここで大事なのは、地理的位置ではありません。その豊かさです。実をいつもむすばせている危機があり、園の中央から水が流れています。それによってその木々は潤っています。そして川が流れ、そこには金もあります。これが、神が初めに造られた人が住む所でした。

先ほど、世の初めである創世記を見る時、世の終わりである黙示録を見ると良いと言いましたね。黙示録 22 章を開いてください。1-2 節を読みます、「御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。」いかがでしょうか、神は終わりに、私たちの住む都を、初めに造られたエデンの園と同じようにしてください。いや、それ以上のさらに優れた所にしてください。その川はいのちの川であり、また金は、21 章に書いてありますが、大通りが、水晶のように透き通った純粋な金によってできています。

そしてこれは、霊的にも当てはまります。尽きることのない生ける水が、あなたの中から湧き出るのは、ということの主イエスはサマリヤの女に言いました。御霊による新生と、御霊の実を私たちは楽しむことができます。

2C 神の命令 15-16

2:15 神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。

人が労働を始めました。私たちが仕事とか労働と聞くと、何か否定的な思いが付きまといますが、それは3章以降に出てくる、罪を犯してしまった後のアダムに与えられた呪いです。もともとは、仕事は祝福に満ちたものだったのです。

2:16 神である主は、人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。2:17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」

「善悪の知識の木」が神と人との大事な境界線になっている部分です。神と人とは一体になり深い交わりを持っていましたが、「善悪の知識の木」に関しては、神のみに属している、触れてはならない領域なのです。私たちの知恵は主を恐れることであります。人は神に似せて造られましたが、

決して神自身ではありません。究極的に善と悪を判断するその裁きは、神のものであり、人はただ神との霊にある交わりの中で、主を畏れかしこんで生きるように造られているのです。

「これを食べると必ず死ぬ」と主は言われますが、この木から実を食べることは、自分も神のように賢くなりたいという欲求を満たすことです。自分自身が神になるということであり、神から独立して生きることに他なりません。これを行なうと、神から実際に独立します。神から引き離されます。そうすると、命の源である神の御霊から引き離されるので、人の霊はすぐに死んでしまうのです。ちょうど脳に少しの間でも血が循環しなければ、すぐに死に至るのと同じです。

そして、もう一度、なぜ神がわざわざその善悪の知識の木をエデンの園の中央に置かれたのかをお話しします。これは、神と人が似ているがゆえに起こっている問題です。神は自由意志を持っておられます。同じように人も自由意志が与えられました。自由意志が自由意志として成り立つためには、他の選択肢も与えなければいけません。神を愛して、神に従うということではない選択肢も与えなければならぬのです。しかもその選択肢は、魅力のあるものでなければなりません。その魅力あるものを退けて、なお神の命令を守るところに、確かにこの人が神を愛しているのだということが証明されます。神との関わりが意味あるものになるためには、誘惑があってもなお神を選び取るという意志が必要なのです。

後にアダムが罪を犯して、呪いがこの地上に入ってきますが、同じように園においてその呪いを受け取ることを決意された方も、園におられました。ゲッセマネの園です。イエス様は、善悪の知識の木から実を取って食べたその結果を、ゲッセマネの園では神の怒りの杯としてイエス様が身代わりに受け取られました。主は十字架上で、「渇く」と言われました。それは私たちの罪を負っているところから来る渇きです。エデンの園では水があって潤っていましたが、罪を犯した魂は渇きで日照りになってしまいます。けれども、イエス様がそれを代わりに受けてくださったのです。

3A 女の創造 18-25

1B 名づける仕事 18-19

2:18 その後、神である主は仰せられた。「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」

私たちはこれまで、自然界の始まりと人の始まりを見ました。次に、結婚の始まりを見ます。

2:19 神である主が、土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造られたとき、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。人が、生き物につける名は、みな、それが、その名となった。

神が人に、仕事を与えておられます。地を支配せよ、と主が命じられたことを行なっています。神

が、ご自分が造られたものに名前を付けておられました、その頭脳を使う創造的働きを人に任せられます。ですから男はもともと、このように自分で考え、果敢にその仕事に取り組むことを願望している存在として造られています。

2B 一体となる相手 20-25

2:20 こうして人は、すべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけたが、人にはふさわしい助け手が、見あたらなかった。

けれども主は、「人が、ひとりであるのは良くない。」と言われました。主はこれまで、ずっと「良いと見られた」と言われていたのに、まだ一人であるのは不十分なのです。覚えていますか、神はひとりであるにも関わらず、「われわれに似せて」と言われました。ひとりの神なのに三つの人格をもっておられるのです。父、子、聖霊の交わりの中で存在しておられます。同じように、ご自分がお造りになられた人も、自分の傍らにいて助けてくれる存在が必要だと感じられました。特に、神の仕事を行なっている時に、助けてくれる人が必要だったのです。

2:21 そこで神である主が、深い眠りをその人に下されたので彼は眠った。それで、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。2:22 こうして神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。2:23 すると人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」

神は女を造ってくださいました。女がどこから出てきたかが非常に興味深いです。「あばら骨」です。脇から造られたのです。夫婦における男と女の間には秩序があります。男がかしらとして立てられています。けれども、それは決して優劣の差ではありません。女も同じように神のかたちに造られた存在です。その証拠に、男の足からでもなく、また女が男を支配するかのように頭から造られたではありません。脇から造られたのです。夫が神に従い、神に仕えていくときに、共に生活し、そして彼を助けることが女の造られた目的なのです。

そして男が感動して叫びました。「これは、私の骨からの骨、肉からの肉」。男はだれも、いや少なくとも私は、結婚していて一番幸せだと感じるのは、妻がいてそれで自分が自分でいられるという感覚です。妻がいなくなれば、自分の体のどこかが不具になるような感覚です。

そして、動物だけでなく女に対しても名を付けたのですが、これは日本語を読んだらさっぱり分かりません。ヘブル語で、男を「イシュ」と言います。そして女性形にすると「イシュア」です。「ア」という発音が加えられました。ですから、「イシュから取られたのだから、これをイシャと名づけよう」と言っているのです。

2:24 それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

ここに、結婚の定義があります。クリスチャンで結婚を考えておられる方は、聖書的な結婚カウンセリングを受けるべきだと考えますが、この御言葉がその土台になっています。

一つは、とても単純ですが、神は私たちに親を与えられる前に夫婦関係を与えられた、という事実です。初めに結婚があり、それから親子の関係が始まりました。つまり、夫婦関係が親子関係に優先するということです。夫婦は神の前で誓いを交わす時に、それは本当にその通りで、神以外に二人の間に入りこむことがあってはなりません。それが自分の親であってもそうなのです。

そして次に、「男は」とあります。結婚生活は、最初から最後まで男が責任者です。彼は、「妻がこんなことを言った。」とかいう言い訳を決していうことはできません。指導者というのは孤独であります。男はすべてのことを神の前に持って行って、神にあってこの結婚を受け持つという決意がなければなりません。

そして「父母を離れ」ます。日本やアジアにおける結婚生活で問題が起こる大半は、これを行うことができていることに起因しています。これまで父母を敬っていたのですが、両親を敬うということと、自分が自立して神の前に立ち、妻をめとるということはまた別のことです。自分が頭として神の前に立つその勇気と決断、またへりくだりがないと、父母が自分と妻との間に入ってくるようになります。そのために、妻が犠牲を払います。まず精神的な、そして霊的な自立が必要なのです。

それで、「妻と結び合い」ます。この結びつきは、次に「一体となる」とあるように、切っては切り離すことのできない強力なものです。結婚カウンセリングと題して、結婚相手を探す時に、「性格の調和」であるとか、「ビジョンの一致」であるとか、いろいろなことを聞いたことがあります。けれども、結婚をしている人はみな現実を知っていますね。性格など一致するわけがないのです。

この結婚相手探して欠けていることは、「こんな性格だったら良いのに。」とか、「こんなことをできたら良いのに。」とか、条件を付けていることです。これが結婚の前提であれば、その条件がなくなったときに結婚は破綻します。結婚式の誓いの時になんと誓いましたか？「その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」ですね。結婚は本質的に献身です。この誓いにあるような、妻を愛し、また妻が夫に従うという献身さえできれば、性格が違っていようが、多少将来的な計画が違っていようが、すべて乗り越えられるのです。

そして「ふたりは一体となる」とありますが、ここで使われているヘブル語が興味深いです。「エハド」です。「神がひとりである」という時も、この言葉が使われています。これは文法用語では「単複数形」と呼ばれます。同じ「一つ」でも一本の指と、一つの手とでは意味が違いますね。指の場合

は単独で一本しかありませんが、手の場合はその中に五本の指があります。ですから、「一つの
中に複数のものがある」という意味で、「単複数形」と呼ばれるのです。

つまり、夫婦は一つの体になるのですが、その体にはそれぞれの人格があります。神が唯一で
あられるのに父、子、聖霊がおられるように、夫婦も二人で一つになるべく神が制度として設けて
くださいました。

英語では”one flesh”、「一つの肉となる」と訳されています。これは夫婦関係を持つことと共に、
その結実である子息のことを意味しているのでしょう。子において夫婦が一つになっています。イ
エス様が、離婚についてパリサイ人たちに問い詰められた時に、ここの箇所を引用して、「人は、
神が結び合わせたものを引き離してはなりません。(マルコ 10:9)」と言われました。そしてその後
に出てくる場面が、子供がイエス様に近づこうとしている場面です。弟子たちが親をしかっている
時、イエス様はかえって弟子たちに憤られ、「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。(14
節)」と言われました。離婚によって、もっとも犠牲を負っているのは子供です。これだけ、多くの悲
劇を離婚はもたらします。だから神が離婚を憎むと言われました。

2:25 そのとき、人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった。

ここの意味していることは、「彼らは隠すものが何一つなかった」と言うことができるでしょう。神
の前に出ても、そしてお互いが会っても、隠し立てすることがなかったのです。今の私たちはいか
がでしょうか？すべてを透明にして、他の人々に自分のことを明かすことはできるでしょうか？そう
ではないですね。なぜそうなってしまったかは、次の3章に書いてあります。